



～ 夢ひとすじに ～
宮原中だより

自ら学び 心豊かに たくましく

平成 27 年度 第 12 号
平成 28 年 2 月 1 日 (月) 発行
さいたま市立宮原中学校
メールアドレス
miyahara-j@saitama-city.ed.jp
ホームページアドレス
<http://miyahara-j.saitama-city.ed.jp/>

「帰らんちゃよか」パート 2

校長 やました 山下 せいじ 誠二

1月号での「帰らんちゃよか」に対して、鍛冶自治会の上野健次郎会長からお返事をいただきましたので記載いたします。

私の田舎は、山下校長先生と同じ九州の熊本です。家の後ろには山が連なり、前は田んぼで、川には魚が泳いでいて、橋の上から見ると黒い群れをなしています。そんな魚を釣ろうとする釣り人はいません。住んでいる人にとって、川に魚がいるのは当たり前のことだからです。そんな中で私は青春時代を過ごしてきました。私の家は、4人兄弟で、姉は嫁いで熊本に残りましたが、男3兄弟の就職先は、兄が神戸弟が大阪、そして私が東京でしたので、熊本の実家は両親だけの二人暮らしになりました。一方、私の周りの家では、兄弟のうち一人は、親の意向で熊本に残っていました。私は、そのことがずっと気になっていて、熊本に帰ったある時、母に「男兄弟の一人をなぜ熊本に残さなかったのか」を聞いてみました。その時母は、「あんたたちの自由にさせたかった」と言いました。山下校長先生の言葉を借りれば、母は「帰らんちゃよか」と言ったわけです。私は30歳前で、後戻りのできないところに来ていました。そのとき私は、家というものが崩れていく様を感じました。あれから40年、私は進路を自由に選ばせてくれた親に感謝しています。

上野会長、ありがとうございました。ちなみに、私の母は、昭和12年生まれの78歳です。今月で79歳になりますが、いまだに個人の税理士事務所で月曜日から金曜日までフルタイムで働いています。3月になると確定申告の時期になりますから、帰りが午前様になることもあるようです。

さて、宮原中学校学区に住んでおられる皆様も、田舎を持ち、正月やお盆には帰省をし、墓参り等に行かれる方も多いと思います。しかし、みんながそのような環境にいるわけではありません。福島から、およそ250キロ。東京の湾岸地域にある36階建てのマンションに、福島県から避難されてきた1,000人余り方が暮らしています。ある夫婦が身を寄せているのは21階、6畳2間の部屋。この夫婦は、東京電力の下請け会社で共に働いてきました。老後は年金で穏やかな暮らしが続くと思っていました。しかし、原発事故が夫婦の人生を大きく変えてしまいました。夫婦は自宅の状況を確認めようと、一時帰宅しました。夫婦共稼ぎで、ようやく手に入れ40年暮らしてきたわが家。しかし、何者かによってガラス戸が開けられ、桐だんすの中にしまっておいた夫婦の記念日に買いそろえてきた着物など、全て持ち去られていました。まもなく5年という歳月が突きつける厳しい現実。夫婦は「本当に…。本心、できるならもう一度帰りたい、帰りたいです。もう自分では帰らないと決めておいても、やはり帰りたいのは帰りたいです。夜になるとここは、東京では夜景がきれいなとこだといわれていますけども、きれいであっても私はやっぱり、あのふるさとのぽつりぽつりした明かりがね、恋しいです。」と……。 「帰らんちゃよか」という親。その反面、「帰りたくても帰れない」という現実。 “ふるさと離れ 遠くへ来たよ。ふるさとはいい。けれど帰れない。帰りたいな わがふるさとへ。帰りたいな わがふるさとへ” 今年は、3年ぶりに実家に帰省し、元気な姿が見せられたらと思います。

